

イギリス文学評論

III

Critical Studies in English Literature

内多 毅 監修

杉本龍太郎 編

内田能嗣

イギリス文学評論

III

Critical Studies in English Literature

内多 毅 監修

杉本龍太郎 編

内田能嗣



創元社

監修者	内 多 毅	東海大学名誉教授，文学博士
編 者	杉本龍太郎	大阪女子大学教授
	内 田 能 嗣	帝塚山学院大学教授

執筆者	山田由美子	相愛女子短期大学講師
	西 條 敦 子	大阪成蹊女子短期大学講師
	飯沼万里子	光華女子大学助教授
	斉 藤 隆 文	大阪外国語大学助教授
	正 木 建 治	大阪女子大学助教授
	岸 本 吉 孝	梅花女子大学教授
	田村英之助	立教大学教授
	佐 野 雅 彦	中央大学教授
	朝 日 千 尺	園田学園女子大学教授
	三ッ星堅三	松蔭女子学院大学教授
	都 留 信 夫	明治学院大学教授
	玉 井 暲	大阪大学助教授
	上 山 泰	関西大学教授

イギリス文学評論Ⅲ

1988年11月20日 第1版第1刷発行

	監修者	内 多 毅	たけし 毅
検 印 省 略	編 者	杉 本 龍 太 郎	りゅう た 郎
		内 田 能 嗣	よし つぐ 嗣
	発行者	矢 部 文 治	

印刷所 株式会社 太 洋 社

発 行 所	株式 創 元 社
本社	大阪市北区西天満 1-4-2 〒530 電 話 ・ 大 阪 (363) 2531 (代) 振 替 大 阪 5-57099
東京支店	東京都新宿区山吹町 334-11 〒162 電 話 ・ 東 京 (269) 1051 (代)

© 1988 ISBN4-422-81033-2 Printed in Japan

イギリス文学評論Ⅲ

目 次

序論——内多毅 3

詩の部

第1章——山田由美子 15
・『オセロー』——黒の祝婚歌

第2章——西條敦子 26
・『マクベス』——眠りを喪失した世界

第3章——杉本龍太郎 37
ハーバートの奇想詩

第4章——飯沼万里子 49
「快活な人」の正体は？——『快活な人』と『沈思の人』再読

第5章——斉藤隆文 60
○「ルーシー」詩群——ワーズワスにおける生と死の逆説

第6章——正木建治 71
語りの振幅——「トリストラムとイズールト」試論

第7章——岸本吉孝 82
・『荒地』への道——技巧を視点として

第8章——田村英之助 92
ラーキンにおける現実性について——「教会を訪ねる」を中心にして

小説の部

第1章——佐野雅彦 107

幸せな家庭を求めて——『説得』論

第2章——朝日千尺 120

『メアリ・バートン』——共感の愛から正義の愛へ

第3章——三ツ星堅三 131

『ピックウィック・ペイパーズ』にみられる「闇」の世界

第4章——内田能嗣 143

○『サイラス・マアナー』におけるコントラスト——寓話的世界と現実的世界

第5章——都留信夫 158

ハーディ小説の出発点——『緑の木陰』について

第6章——玉井暁 167

『家のなかの子供』における「旅立ち」

第7章——上山泰 181

『トマス・ハーディ研究』にみられる D. H. ロレンスのハーディ論

あとがき 193

イギリス文学評論III

序 論——literary theory と literary taste

1 文学用語と批評用語

ロジャー・ファウラー (Roger Fowler) は 1973 年に『現代批評用語辞典』(*A Dictionary of Modern Critical Terms*) を公にした。これまでの文学に関する用語辞典は literary terms の dictionary であった。彼は literary をあえて critical に改めた。彼は単に修辭的な範囲にとどまっていなくて、社会の現実のすべてを取り入れて、文学は考えるべきであるという考えに立ったのであった。

1973 年から 14 年が経過して、1987 年にこの辞典の改訂増補版が刊行されることになった。それが『現代批評用語辞典 改訂増補版』(*A Dictionary of Critical Terms. Revised and Enlarged Edition. Routledge & Kegan Paul, 1987.*) なのである。ここでは初版の各項目が修文されているとともに、新しい項目がいくつかある。‘poststructuralism’, ‘feminist criticism’, ‘marxist criticism’ といったような項目があらたに採用されている。

この辞典出現の背景をなしているものは何なのであろうか。1930—60 年にアメリカで流行した New Criticism を否定して登場してきた 1960—70 年代の新しい「文学理論」(‘literary theory’) があるであろう。さらにいうならば、1968 年の五月革命とも関連をもつであろうし、さらにまた 1964—68 年のヴェトナム戦争もより大きな背景をなしているかもしれない。これらに共通することは、権威に対する異議の申し立てということであった。権威とされてきた作者の意図を忖度するのではなく、読者がいかに読みわけていくのか。大学の管理の下に学生が服従していくのではなく、学生が教育を自主管理しようとする。‘Pax Americana’ に屈従しなくて、それぞれの民族がそれぞれの文化を主張していくこと。文学批評が安定から流動へとさまがわりをしていくなかにあつて、その方法論も技法の問題から、歴史や社会の問題をそのなかに取り込んでくるようになった。ファウラーのこの辞典には ‘sonnet’ の項目はないが、‘historicism’ の項目はあるのである。

2 伝統への挑戦としての文学理論

1960年代以降、ドイツ、フランス、アメリカにおいて展開された文学理論は、反啓蒙、反ルネサンス、反ロゴスの旗じるしを掲げた。ギリシアのプラトーン以来のヨーロッパの伝統となってきた知の形而上学に対して、きわめてラディカルな問いかけをしていくことになった。神、王、言語、文化、科学など、それ自体において自律的な存在と考えられてきたものは、実は、「物神」(‘fetish’)にすぎないということが唱えられるようになった。何かを盲目的に崇拝することによって、秩序が保たれもしたが、その秩序の恩恵を受けたのは一部の人たちで、多くの者は重大な被害を受けたという認識がようやく広く受け入れられることになった。今、1980年代がようやく終わろうとすると、過去30年間にわたって行なわれてきた文学理論を、改めて思い返してみることは無意味ではあるまい。次に3つの文学理論の概略を述べてみたい。(イ)「受容理論」(‘reception theory’), (ロ)「構造主義」(‘structuralism’), (ハ)「脱構築」(‘deconstruction’).

(イ) 受容理論は、作者、作品、読者についての伝統的な考え方に大きな修正をもたらした。受容理論を推しすすめた人々のなかから、ヤウス、イーザー、バルト、フィッシュの4人について述べてみたい。

(i) 西ドイツはコンスタンツ大学教授のヤウス(Hans Robert Jauss)は、アメリカのクーン(Thomas Samuel Kuhn)が科学史の方法論として提唱した「パラダイム」(‘paradigm’)理論を、文学史の理論として取り入れて受容理論を切り開くことになった。クーンはカリフォルニア大学の科学史教授在任(1961-64)中に、『科学革命の構造』(*The Structure of Scientific Revolution*, 1962)を公にした。クーンのパラダイム理論とは次のようなものである。科学の知は常識では、客観的で普遍的で確実に進歩の線上を歩みつづけるもののように思われてきたが、これは科学を物神化する誤った考えである。科学の進歩の歴史は、一本の線上を走りつづけてきたのではない。ある思考枠が使用に耐えなくなると、全然別の思考枠に従って研究が推しすすめていかれることになる。科学の歴史は連続的でなく、非連続的であるというのである。

ヤウスはこのパラダイム理論を文学史に取り入れた。文学史はそれまで連続的なものとして書かれてきたが、ヤウスは文学史を非連続の連続として考え直そうとした。どうして非連続となるのか。作者中心の文学史においては、思想

体系のなかに作者がそれぞれに位置を占めることによって体系化することが可能であるかもしれないが、それは作者を歴史の現実から遊離して思想世界に移住させることであろう。文学を作者中心から読者中心に視点を移動して考えると、読者は歴史のある時点において、必ずしもその前の時点の思考枠を受けつぐことはない。このようにして文学史は非連続の連続となる。ヤウスはこのようにして1970年に『挑発としての文学史』(*Literaturgeschichte als Provokation*)を公にした。

(ii) このヤウスの文学理論を継承するのが、大学の同僚であったイーザー(Wolfgang Iser)であった。イーザーは『行為としての読書』(*Der Akt Des Lesens*, Wilhelm Fank Verlag, 1976. 英語版は *The Act of Reading: The Theory of Aesthetic Response*, Baltimore: The Johns Hopkins University, 1978) を公にした。このなかでイーザーは「作品」('work')と「テキスト」('text')とを使いわけ、作品とは作者によって書かれるものであるが、テキストは読者によって読まれるべきものだとするのである。文学作品は作者の独占物ではない。読者がテキストの共同作者だというのである。読者はテキストのなかに存在する「空所」('blank')を発見し、それを埋める仕事をすることで共同の作者となるというのである。ここで伝統的な考えで「著者」('author')にあたえられてきた「権威」('authority')は、大いに揺らぐことになった。ここでは「著者」('author')ではなくなり、「作者」('writer')となった。そして、さきに述べたように「作品」('work')ではなく、「テキスト」('text')となった。

(iii) フランスのロラン・バルト(Roland Barthes)には『物語の構造分析序説』(*Introduction à l'analyse structurale des recits*, Paris, 1961-71)がある。そのなかに「作者の死」と題する一文がある。その最後のところで、読者の誕生が作者の死によってあがなわれなければならないといいきっている。伝統的な文学批評では作者の意図を推しはかることにこれつとめた。今や作者が死んで読者が誕生してきたのである。イーザーとロラン・バルトでは、作者-テキスト-読者の関係のニュアンスを異にする。イーザーはテキストの空所を埋めるにとどまるが、ロラン・バルトの読者はテキストを限りない愉悦の対象にする。このことは『テキストの快楽』(*La plaisir du texte*, Paris, 1973)や『彼自身によるロラン・バルト』(*Roland Barthes par lui-même*, Paris, 1975)によくあらわれている。

(iv) アメリカのフィッシュ(Stanley Fish)には『このクラスにテキストはあるか?』(*Is There a Text in This Class?* Cambridge, Mass., 1980)がある。フィ

フィッシュによると、大学の演習の時間に各自が意見を述べあっているときには、読者の体験が大きな意味をもつようになり、テキストの存在は限りなく非存在に近づく、というのである。そうだったらいいそのこと、この演習室にはテキストなど存在しないことにしたらと提案をするのである（このフィッシュの提案は理論的には矛盾していることはあきらかであり、彼は百も承知のうえであっけらかんとしているのである）。イーザーによって作者が権威の座から降ろされたように、フィッシュによってテキストもまた非存在に近いところまで弱められていった。そしてここに読者の地位が高まってきた。

権威の転倒ということが、今、着実に進行している。1987年8月24日の『朝日新聞』の「社説」のなかで、福井県庁で使用する文書のことについて述べていた。これまでは、「イスは所定の位置に戻すこと」という貼紙をしていたのを、「イスは元の場所に戻してください」という文言に改めたというのである。「所定の位置」というのは「官」の視点であるが、「元の場所」というのは「民」の認識である。

(ロ) 構造主義。受容理論は読者の存在に焦点をあてることによって、作者の権威に疑問を投げかけた。構造主義は、西ヨーロッパ近代の基盤ともいうべき個人の自由、独立といったものへのラディカルな問いかけとなった。

中世においては、人間の知覚—認識は神によって成り立った。近代ジョン・ロックでは自然によって成り立った。これらはいわば「自然的なるもの」(‘natural’)ということができるのであろうが、20世紀になると、これに対して、構築されたシステムによって、われわれの知覚—認識はつくりあげられていくので、「構築的なるもの」(‘constructed’)という考えが生まれてきた。人間はここにおいて構造のなかの「機械的」(‘mechanic’)な存在にすぎないことになり、ヨーロッパ近代において主張されてきた個人の自由、独立は大幅に揺らぐことになった。

こうした構造主義の根底にはソシュールの言語学がある。彼は1907—11年の間スイスで、後に『一般言語学講義』(*Cours de linguistique générale*, 1916)となる講義をした。彼の考えはロシア系の言語学者ヤーコブソン(Roman Jakobson)に受けつがれた。サンパウロ大学教授(1935—38)をしていたフランスの人類学者レヴィ=ストロース(Claude Lévi-Strauss)は、ヤーコブソンからソシュールの言語学を知らされた。レヴィ=ストロースはソシュールの方法論を取り入れて構造人類学を樹立することになった。『悲しき熱帯』(*Tristes tropiques*, 1955)

や『野性の思考』(*La pensée sauvage*, 1962) が、構造主義人類学を確立するものとなった。

伝統的な言語学ではデンマークのイエスペルゼン (Jene Otto Harry Jespersen) の考えが受け入れられていた。語の単位となるものには、それぞれ個々の意味があるとされた。そればかりでなく、語の単位となるものの間にはヒエラルキーがあるともされた。イエスペルゼンの『文法の哲学』(*Philosophy of Grammar*, 1924) には、‘primary word’ (名詞), ‘secondly word’ (動詞), ‘thirdly word’ (修飾語) といった分類がなされている。ソシュールは、語には固有の意味はないと主張した。すべてシステムに基づく関係のなかで、そのつど意味が生ずるとするのである。一つ一つの単語というものは、いわば将棋盤の上を、ルールによって動かされる駒のようなものである。「歩」と呼ばれる駒も、敵の陣地に入り込めば、「金将」と同じ力を発揮してくる。「王将」といえどもシステムの力学によって、盤上の隅っこで悶死をとげる。こういうことは単に将棋だけではない。人間存在も同じことである。中国の詩人、劉廷芝に「代悲白頭翁」という詩がある。そのなかに「桑の変じて海と成る」という言葉がある。そこから「桑滄之変」という慣用語が生まれた。桑田はいつまでも桑田ではない。地殻の変動とともに海となってしまう。逆に海底が山の頂きになることもある。ヒマラヤの山中には海底に住んでいたアンモナイトの化石が出てくる。世界の屋根ももとは海底であった。地殻のシステムと力学とで海底が世界の屋根へと隆起していく。構造の力学の仕業である。個人にとっての自由、独立は実在であるのか幻想であるのか。また個人に、威厳、尊厳などいうものが実在なのか幻想なのか。ヴィクトリア朝の謹厳のチャンピオンであったヴィクトリア女王の知られざる一面が暴露される。Stanley Weintraub の *Victoria. An Intimate Biography* (Dutton Truman Talley Books, 1987) はこうした時代の流れのなかで、出るべくして出てきたのではないか。

構造主義による文学批評の書物としては、カラー (Jonathan Culler) の『構造主義詩学』(*Structuralist Poetics*, Cornell University Press, 1975) や、ファウラーの『社会的言説としての文学』(*Literature as Social Discourse*, London: Batsford, 1981) などがある。

い) 脱構築は受容理論、構造主義よりもはるかにラディカルに西ヨーロッパの知の伝統に対して挑戦的である。プラトーンからデカルト、ヘーゲルへと受けつがれてきたロゴスというものは、実は、一つのドグマにすぎないのではな

いかという疑問を投げかけてくる。単に知がドグマだというだけではない。知の構造のなかには権力の構造が同居していることを暴露しようとするのである。

(i) フランスのフーコー (Michel Foucault) は、だれもが信じて疑わない「慣習」 ('conventions') が、実は、おそるべきロゴスの犯罪の化石だと考える。理性の間尺にあったものだけを「真」とし、それ以外のものを「偽」と決めつけながら、慣習を積み重ねてきた。こういう過程において、理性の間尺にあわぬものは、狂人または犯罪人として社会から隔離されるのが当然であるという慣習を確立していった。フーコーにとっては、狂人や犯罪人はもともとそうしたもののとして存在したのではなくて、理性と言葉とが共犯者となってつくりあげていったものなのである。理性と言葉とがすべての差別を生み出したからである。フーコーはこういう視点から次のような書物を公にした。『古典主義時代における狂気の歴史』 (*Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, 1961), 『監視と処罰—監獄の誕生』 (*Surveiller et punir*, Paris, 1975)。

(ii) デリダ (Jacques Derrida) は実存主義や現象学と対決しつつプラトーン以来のロゴス中心主義をラディカルに批判することに立ちあがった。彼は哲学の領域にとどまることなく、文学、言語学においても、ロゴスの爪あとを暴露しそれを解体しようとして戦う。1967年には『文法論』 (*De la grammatologie*) と『エクリチュールと差異』 (*L'écriture et la différance*) とを公にした。彼の考えはアメリカのエール大学の教授たちによって受け入れられて、「エール批評家」 ('Yale Critics') と呼ばれるグループを生み出すことになった。ポール・ド・マン (Paul de Man) は『読みの寓話』 (*Allegories of Reading*, New Haven, Conn., 1979) を、ミラー (J. Hillis Miller) は『小説と繰り返し』 (*Fiction and Repetition*, Oxford, 1982) を公にした。

脱構築は解体に解体を重ねていつまでそうした作業を続けるのかという批判が寄せられる。しかし、われわれは人間理性の驕りが、西ヨーロッパの文明を築きあげる反面において、大航海時代以来の植民地主義、帝国主義の爪あとをアフリカの黒人たちのなかに、北米インディアンたちのなかに、中南米インディオたちのなかに残していることを思うとき、今しばらくはこの解体作業を続けなくてはならないのであろう。

3 イギリスの文学趣味

ケンブリッジ大学の英文学の長老グレアム・ハフは、今日の人々が文学理論

をあげつらうことにあけて、名作を楽しむことをおろそかにしていると、『ロンドン・リビュー・オヴ・ブックス』の「投書欄」(1985年10月17日)で嘆じたといわれる。文学理論嫌いはハフだけではない。イギリス人は文学理論より文学趣味のほうが肌に合うようである。18世紀ではアディソン(Joseph Addison)が『スペクティター』(*The Spectator*)誌で、「趣味」(“taste”)論を展開した。20世紀ではベネット(Arnold Bennett)が『文学趣味・その養成法』(*Literary Taste. How to Form It*)を書いた。ベネットはいう。文学趣味をどのようにして身につけるのか。まず書物の雰囲気をつくれ。そのためにはほとんど本を買い込め。どういう順序で読んでいくかって? 手当たりしだいに読め。お腹をすかした犬が一つの骨を咬えたときに、どちらの端からかじろうかなど考えはしない。いずれ骨はすっかり平らげてしまうものだ。

「知は力なり」といいきったベイコン(Sir Francis Bacon)のような人がいるにはいたが、全体的にみて、イギリス人は科学よりか文化に軍配をあげてきた。16世紀の終りにシドニー(Sir Philip Sidney)は『詩の弁護』(*Apologie for Poetrie*)を公にした。これはゴッソン(Stephen Gosson)が『悪徳学校』(*School of Abuse*)で詩を非難したことに答えたものであった。ゴッソンは詩に対する非難の第一として次のことをあげた。人間にとって詩以上に実益のある知識があるのだから、詩などに時間を費すべきではないと。これに対してシドニーは次のように答える。あらゆる学問は美德を教えることを目的としているが、詩ほどにこの目的にそったものはないのだと。17世紀の終りから18世紀にかけて「新旧の争い」(“The quarrel between the ancients and the moderns”)が戦われた。スウィフト(Jonathan Swift)は『書物戦争』(*The Battle of the Books*)で、科学の陣営でなく古典の陣営に加わった。19世紀にピーコック(Thomas Love Peacock)が『詩の四つの時代』(*Four Ages of Poetry*)で、文学批評も科学的な見地に立つべきことを主張したときにも、すかさずシェリー(P.B. Shelley)は『詩の擁護』(*Defence of Poetry*)でそれへの反対を表明した。20世紀ではスノー(C.P. Snow)が『二つの文化と科学革命』(*The Two Cultures and the Scientific Revolution*, 1959)を書いて文化と科学とを同等に扱い両者を融合させようと主張すると、リーヴィス(F.R. Leavis)は1962年2月はじめの「リッチモンド講義」(“Richmond Lecture”)で、スノーを攻撃した。リーヴィスは19世紀のアーノルド(M. Arnold)の流れのなかにあり、詩は宗教が衰えた今、それにかわる役割を果たすべきであるとするものである。

イギリスでは文学趣味がモーラルと手をつなぎながら科学的な文学理論には

背を向けてきたように思われる。そこにはイギリスの伝統、エスタブリッシュメント、があまりにも強いからであろう。オズボーン (John Osborne) が『怒りをこめてふりかえれ』(*Look Back in Anger*, 1956) でイギリスのエスタブリッシュメント攻撃の火ぶたを切ったが、彼に続いたエイミス (Kingsley Amis), ウェイン (John Wain) らともども、やがてエスタブリッシュメントに吸収されていった。

4 今、批評が対面するもの

われわれは実にいいかげんな生活を毎日送っている。一つの例をあげたい。利根川の水量が増してきている。豊かに流れる川は人々の目を楽しませ心をなごませる。ところが河川工学の専門家からすると、これはまさに危機としてうつるのである。どういうことが心配されるのであろうか。利根川の水量が増加した理由は、第一には、治水工事が進んで小さな川が利根本流に流れ込むようになったからである。第二には、住宅開発やゴルフ場の建設で森林が消え去り、同時に雨水の貯蔵庫であった樹木の根が取り除かれたからである。第三には、市街地、道路の舗装が進んだために雨水はストレートに利根川に誘導されていくことになった。第四には水田という貯水槽が大幅に減反になったことである。こうしたことで水量の増した利根川は常時堤防を洗っている。水の浸蝕が四六時中続けられる。このことが台風や洪水時に堤防の決壊を引き起こすことにつながるのである。河川工学の専門家たちは利根川がどこで決壊しても不思議ではないといいきる。それなのに、われわれは螢を放ったり花火をあげたりして、実にのんびり毎日を暮らしている。われわれは感性によってのみすべてのことを解釈しきっていいものであろうか。感性とともに理性を働かせることがなくては生きていけないのではないか。われわれは今、等身大の物尺ではとうてい把握できない世界に住んでいるのではないか。スーパー・コンピューターが1秒間に何億回もの演算をはじき、われわれは 10^{10} とか 10^{-10} とかいったとてつもない事象とつきあっている。

こういうときの文学批評とはどういうものになってくるのであろうか。ロジャー・ファウラーは『言語学的批評』(*Linguistic Criticism*, Oxford University press, 1986) の「結び」の章で「われわれは読んでることだけでは批評家にはなれないのだ」(p. 180) といって、言葉というものを厳密な科学的な言語学的分析の対象としなくてはならないことを主張している。なぜ言語に対してはその

ような厳しい分析を加えなくてはならないのであろうか。言語学者のサピアは、言葉というものは未知のものを開いてみせてくれる「鍵」(‘key’)でもあるが、また人間に「足かせ」(‘fetter’)をかけるものでもあるという意味のことを述べたといわれる。このことはフーコーが主張するところにも通じることであろう。われわれの文学へのアプローチは‘literary’であるとともに‘critical’であることをわれわれに迫っているのが現代文明の今の段階であるのであろう。19世紀以来の‘productive capitalism’が今や‘consumer capitalism’へとさまがわりをはじめた。19世紀の労働者はもう社会の担い手ではなくなり、消費大衆——若者と女性とが社会の担い手として登場してきている。しかし、先進国も発展途上国も中進国もすべてこの構造の転換に対応しきれないでいる。私はジェイムソン(Fredric Jameson)の論文‘Postmodernism and Consumer Society’(*The Anti-Aesthetic. Essays on Postmodern Culture*, ed. by Hal Foster, Bay Press, Washington, 1983)に関心を寄せるものである。